



「定置漁具の由来」より

ブリ水揚げの様子

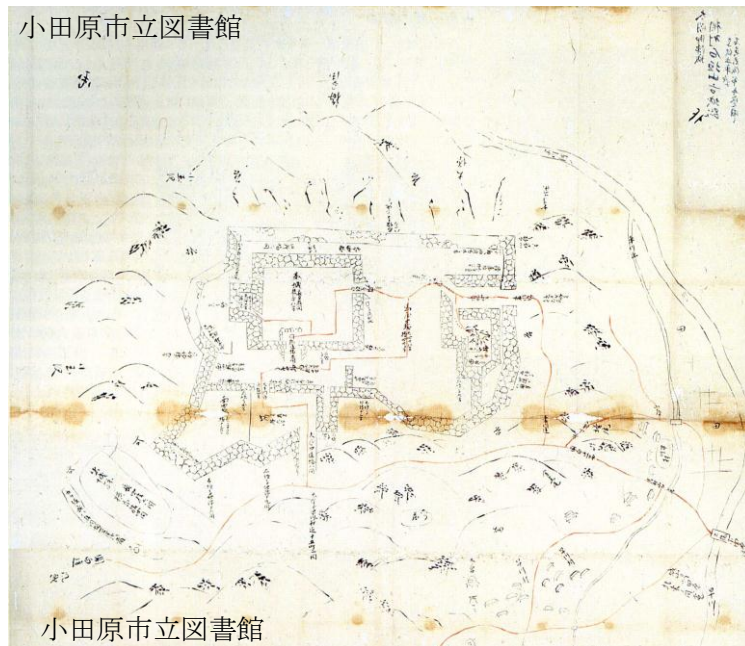
～図書館所蔵古写真から～

写真は水揚げされ、浜に並べられたブリを魚市場に運ぼうとする人々を写したものです。

小田原では中世以前より漁業が行われてきました。明治時代は主としてブリ、サワラ、マグロ、アジ、サバが取れ、定置網を中心に延縄漁や地引網漁などの漁法が存在しました。そして明治12年(1879)には千度小路(本町)に魚市場が開設されました。1900年代に入ると、株式会社小田原魚市場が開設され、大正11年(1922)に既存のいくつかあった魚市場が小田原魚市場に統合されました。また、この頃にはブリの定置網漁が盛況で、「ブリ大尽」ということばがそうした当時の活況を表しています。

なだらかな海岸が続く小田原では、大規模な漁港が存在しませんでした。そのため、写真に見られるように、砂浜に魚が直接水揚げされ、奥に見える魚市場でせりかけられました。昭和25年(1950)から早川河口で漁港の工事が始められ、付帯施設を含め、昭和44年(1969)小田原漁港が完成しました。機能が充実した小田原漁港には県外からの漁船の利用も増加していきました。

千度小路(本町)にあった魚市場も昭和43年(1968)に早川の漁港に移転しました。その後「小田原市公設水産地方卸売市場」と改称し、販路も県内に留まらず、県外まで広がっています。



この資料は、小田原藩士であった有浦家に伝わる城絵図の一枚です。豊臣秀吉が小田原攻めに際して築いた石垣山城を描いたものです。豊臣秀吉は北条氏攻撃のため、全国の大名に動員をかけ、小田原城を包囲しました。その本営として築かれたのが石垣山城です。一般に一夜城とも呼ばれ、簡易な施設だったという印象もありますが、実際は惣石垣の恒常的施設で、瓦葺の建物があつた城郭でした。また、小田原合戦の翌年である天正19年(1591)の銘が刻まれた瓦が確認されるので、大久保氏によって合戦以後も石垣山城が管理されていたと考えられます。

絵図に示される城の構造は、軍学の影響がみられるものの、現在確認される構造に近い状態です。石垣がはっきり記される部分と、空白の部分がありますが、それらは地震による崩落を示したものであると想定されております。逆に、石垣が記されている部分には石垣が存在していたと考えられます。

そして、この絵図は享保5年(1720)に時の小田原藩主であった大久保忠方の命令によって作成されたことが絵図の裏書(現在は軸装のため、右上部分)から判明します。

明確な作成の意図ははっきりしません。絵図作成の時には「古城跡」として、そのまま維持されていたわけではありませんが、大久保氏が管理に関わっていたということが関係しているのかもしれませんが。

また、この絵図を伝えてきた有浦家は小田原藩の中でも、主に軍事・警察部門の役職を担当する家柄でした。そのため、兵学に関する史料が数多く伝わっております。

小田原市立図書館地域資料室 利用案内

小田原市立図書館(星崎記念館)2F

年中無休(月一回の特別整理日、年末年始は除く)

資料の出納・ご相談は9時～12時、13時～16時45分に承ります

室内の資料は原則貸し出しできません

※ 本紙で紹介した資料は予約・閲覧申請の手続きをしていただければ、ご覧いただけます

編集後記

本紙バックナンバーのインターネット配信が始まりました。

市役所のホームページから、図書館の「図書館情報」のコーナーへどうぞ。